福井県立美術館 2012

美術館だより

MUSEUM NEWS Vol.136

contents

魔法の美術館 [2～4]
移動美術館　小浜展１ [4]
所蔵品によるテーマ展 [5]
〈イベント報告〉
「ストラスブール美術館展
―ゴーギャン、ピカソからローランサンまで―」 [5]
福井県立美術館ボランティアの会 [6]
福井県立美術館友の会 [7]
小野忠弘展 vol.2　ドローイング作品を中心に　―線の力― [7]
お知らせ・貸館情報 [8]
福井県立美術館　次回の企画展案内 [8]

表 紙：クワクボリョウタ《10番目の感傷（点・線・面）》影を使ったインスタレーション作品　©ryota KUWAKUBO　Photo:Keizo Kioku/ICC　（「魔法の美術館」展より）

お知らせ

◎７月～９月の休館日について

展示替え、館内メンテナンス等のため、次の日は休館とさせていただきますのでご了承ください。
７月17日㈫～26日㈭、９月３日㈪、12日㈬～15日㈯、24日㈪

貸館情報 [7/27~8/26]

7/27～7/29	第34回北庄篆会展	8/16～8/19	アトリエ・ターコイズ
8/ 3～8/ 5	第40回福井県朝日写真展	8/22～8/26	福井県写真作家連盟展
8/ 8～8/12	第9回ひろの会日本画展		

福井県立美術館 次回の企画展案内

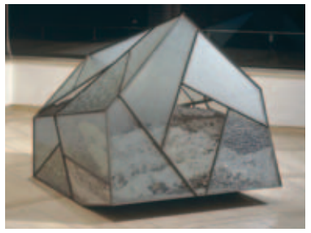
土屋公雄展

2012年９月16日㈰～10月21日㈰

土屋公雄（つちや・きみお）は、1955年福井県生まれの彫刻家、環境造形アーティストです。朝倉文夫賞、現代日本彫刻展大賞などを受賞し、サンパウロビエンナーレに選出されるなど、日本を代表する現代アーティストの一人として活躍しています。世界各地より招待され、土地や人々の記憶を刻むパブリックアートも数多く手がけ、国内では丸ビルモニュメントや、東京空襲犠牲者追悼の平和モニュメント制作でも知られています。本展では作家の円熟期をとらえ、福井の記憶や風土を盛り込みながら、これまでの集大成を、美術館全館を使った大規模な新作インスタレーションとして展開します。

略歴：
1955 福井県福井市に生まれる
1977 日本大学芸術学部建築デザイン科卒業（芸術学部奨励賞受賞）
1981～83 渡英する（在ロンドン）
1989 チェルシー美術大学大学院彫刻科修士課程修了(ロンドン)。ブリティッシュ カウンシルよりグラントを取得
1990 第3回朝倉文夫賞受賞
1991 第14回現代日本彫刻展大賞受賞(宇部／山口)　英国アーツ　カウンシルよりグラントを取得
1992 第13回神戸須磨離宮現代彫刻展優秀賞受賞(兵庫)
1993 五島記念文化賞美術新人賞受賞。USIS（アメリカ国務省）のプログラムにて米国視察
1999 オナラリー賞受賞(ロンドン)。ロンドン芸術大学より名誉学位授与
2003 第11回本郷新賞受賞
2004 作品「記憶の領域」が文化庁買い上げとなる。
2010 愛知県立芸術大学プロジェクトチームとして瀬戸内国際芸術祭に参加

▲参考図版：映像「The Sinking Time」 2004年 国際芸術センター青森



▲参考図版：「不在」 1992年　世田谷美術館

▲参考図版：「記憶の家－覚醒する時間」 2003年 発電所美術館（富山）

▲参考図版：「未現像の記憶」 2002年 第25回サンパウロ・ビエンナーレ

芸術とは、人間の魂の抵抗の最後の砦だと思っています。ただ芸術が世界を変え、世界を救えると言っているのではありません。少なくとも人間の内にある人間性というものを救うことはできると信じています。常に我々芸術に携わる者には、堅くて大きな壁が幾重にも立ちはだかります。それは歴史的な壁であり、孤独と創造の壁であり、経済という壁です。これらの壁を通過するには、自らが傷つき打ちのめされることも覚悟しなければなりません。まして今の世界は、バーチャルなイメージが現実を覆いつくし、芸術はサブカルチャー化し、日常世界にとろけ出してしまっている状況の中で、かつての「大きな物語」としての美術の規範が我々を支えてくれるわけでもありません。我々は今、新たなる価値を見つけ出す為にも耐えながらこの現実世界を直視し、自己の内面を見つめることで新たなる旅に出るしかないのです。

土屋公雄

（土屋公雄のブログより「プロフェッサーズ・ビューズ」インタビュー　2009年７月）

所蔵品によるテーマ展
「土屋公雄コラボレーション展」
2012年９月16日㈰－11月４日㈰
＊本展観覧券にてご覧いただけます

美術館だより第136号　　本誌は再生紙を使用しています。

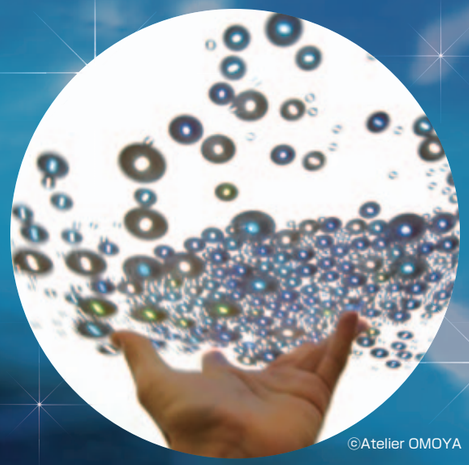
編 集／発 行：福井県立美術館　〒910-0017 福井市文京３丁目16-1　tel.0776-25-0452　印 刷：河和田屋印刷株式会社　発行日：平成24年７月11日　12.07.20220

Magical Art Museum
魔法の美術館

平成24年 7月27日金－8月26日日

「見て」「触れて」「遊んで」、子どもから大人までゲームのように楽しみながら、現在活躍中のアーティストたちの作品の数々を体で感じる「超体験型」の展覧会。人の動きに合わせて変幻自由に変化する光、不思議な音や映像、そっと動き出す影たちなど、光をテーマにした作品の数々が、この夏、美術館を魔法の空間に変身させます。

※インスタレーション作品：空間全体を体験させる作品



©Atelier OMOYA

ビー玉を使った参加型インスタレーション作品

アトリエオモヤ　《光であそぶ》

ビー玉を光にかざして下から覗き込むと、とてもきれいに輝いて見えます。一枚の布越しに見ると、ビー玉は、実在感を伴った光のショーへと変化します。確かな手ざわりとともに美しく広がる光の現象。スクリーンは、床からの高さや、ビー玉の色、サイズがそれぞれ異なります。インタラクションと同時に、さまざまな世界が広がることでしょう。

©daito MANABE/satoru HIGA

リアルタイム映像を使った疑似体験作品

真鍋大度／比嘉了　《happy halloween!》

参加者がカメラの前に立つと、顔を動画で撮影します。その映像をリアルタイムで動画としてコンピュータ処理し、参加者の顔にハロウィンの様な仮装を施します。参加者はハロウィンの仮装疑似体験をコンピュータ上で体験できます。その映像はプロジェクターで壁面に投影されます。

風の流れを利用したインスタレーション作品

鈴木太朗　《風のかたちⅡ》

室内は作品が発する蒼い光に染まります。空間全体が青の世界になります。ランダムに思われる風のかたちは、実はさまざまなプログラムにより時間的な細かな演出をしています。ある時は静まり返り、またある時は作品の端から端を風が流れます。夜の草原に居るような、明け方、日の出る前の海を見ているような雰囲気を作品を通して感じて頂けたらと思います。無数に広がる大小の矩形は、風により上部の布が膨らむと、更に数が増えて見えるように演出しています。空間の気持ちよさを体感してください。

©taro SUZUKI

©kosei KOMATSU

鳥の羽を使ったインスタレーション作品

小松宏誠　《Secret Garden》

「風」と「光」に包まれる素材である「鳥の羽根」。その美しさを「秘密の庭」として空間表現する作品。繊細な制御により空中を舞い続ける花や、生命力を感じる雑草、咲きほこる木、小石のような卵の殻など、全て「鳥が植物になるとどんなだろう?」をテーマに作り込まれています。人が近くを歩いただけで反応する羽でできた超微風観測器などもその不思議な世界観を引き立てます。

■ 開館時間◎午前９時～午後５時（入場は午後４時30分まで）
※8月25日㈯26日㈰は午後7時まで（入場は午後6時30分まで）
■ 観覧料◎一般800円　大高生500円　中小生300円
※30名以上の団体は２割引　※学生割引は学生証の提示が必要です
※身体障害者手帳等所持者とその介護者１名は半額
（ただし障害者手帳等に介護印のある方のみ）
■ 主催・会場◎福井県立美術館
■ 後援◎福井県教育委員会
■ 企画協力◎株式会社ステップ・イースト

関連企画　マッキーくん･にしむ らくんといっしょにアート体験!
7月28日㈯午前10時～　対象:小中生　※観覧券が必要です

©plaplax

影を使ったインスタレーション作品

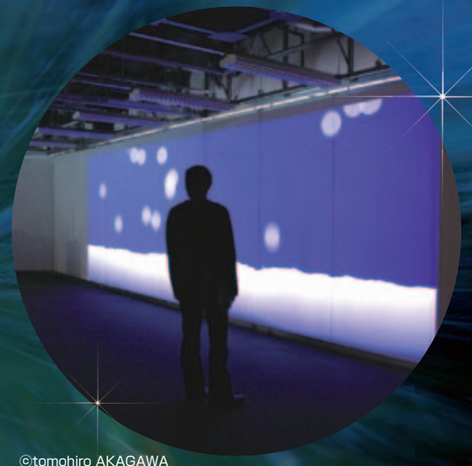
プラプラックス
（近森基／久納鏡子／筧康明／小原藍）　《Kage's Nest》

光の広場に足を踏み入れた途端、自分の「かげ」から得体のしれない「かげ」達が飛び出しては、周囲の暗闇へと消えていきます。ふと辺りを見回してみるけれど、まわりは暗くて何が潜んでいるのか、わかりません。一つだけはっきりしているのは、そこに何かがいる、ということ。本体が見えなくても、現れては消える不思議な「かげ」達はそこに何かが存在することを表しています。それはまた、あなたから生まれた、あなたの分身でもあります。

参加型映像インスタレーション作品

赤川智洋　《Below the Shank》

人が歩くと空から雫が落ちてきて、雫が映像の水面と衝突すると波が立ちます。
水面の高さは、どれだけの人が作品の前を歩いたかを表していて、間接的に数分前の人の流れを感じる事ができます。
足元の水底では膝下程度の大きさのシルエットが静かに歩いています。
落ちてくる雫を立ち止まって見上げたりしますが、ある時ふと立ち止まり、花火のように砕け散ってしまうこともあります。
影絵で遊んだり、シルエットを突ついたり、静かに波を見守ったり、この作品の前で何をするかは自由に考えて下さい。

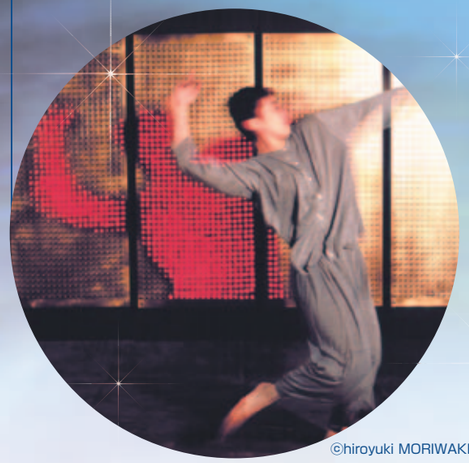


©tomohiro AKAGAWA

LED を使用した体感型作品

森脇裕之　《レイヨ＝グラフィー》

光センサーと発光ダイオードが一組になったパーツがパネルに並んで画面を構成しています。パネルに照明があたっているときは、発光ダイオードは消えていて、影になると点灯します。
観客の影にあわせて、「影絵」のように赤い光が点灯してついてきます。
ふだん気にもとめない影が、ここでは主役になるのです。



©hiroyuki MORIWAKI

©kohei ASANO
協力：東京工芸大学
インタラクティブ
メディア学科

共同参加型映像体感作品

浅野耕平　《Garden》

《Garden》は庭の中の紙吹雪をみんなで舞い上げて花を咲かせる作品です。紙吹雪をたくさん舞い上げると小さな芽が出て、やがて花が咲きます。休むと花は消えてしまうので、そのまま頑張り続けると庭が花でいっぱいになります。

移動美術館　小浜展１

新収蔵品紹介
～日本絵画と中国陶器～

県立美術館では当館のコレクションを嶺南地域の方々にも身近に鑑賞していただくことができるよう、小浜市で年２回「移動美術館」を開催しています。
今回の移動展１では、昨年度に当館が新たに収集した作品の中から、江戸時代前期に活躍した江戸幕府の御用絵師・狩野常信の筆になる新発見の「花鳥図屏風」や、16～18世紀に中国で造られた焼き物を含む、日本画、洋画、工芸などの作品を展示します。ぜひご覧ください。

会　　期：平成24年 **7/25**(水)～ **8/5**(日)　※会期中無休
開場時間：午前９時～午後５時（入場は午後４時30分まで）
観 覧 料：無料　※クールライフプロジェクトの一環

狩野常信「花鳥図屏風」　17世紀（江戸時代）

所蔵品によるテーマ展

テーマ展「工芸の美」

工芸は実用性と芸術性とが融合して制作されたもので、絵画や彫刻以上に身近な存在として、私たちの生活の中に重要な位置を占めてきました。その種類も金工、陶芸、漆工、染織などと幅広く、使用される技法も多種多様です。「用の美」といわれるように、機能性と造形美が一体化したものが工芸の特徴ですが、現代ではそれらを離れた自由な作品も制作されています。今回の展示では様々な種類の作品を展示し、その多彩な魅力をご紹介します。

羽田登喜男「花野」

楠部彌弌「彩埏春日香炉」
20世紀（昭和時代）

政秀「虫尽図前金具」
19世紀（明治時代）

「赤銅牡丹拵総金具大小揃」　19世紀（江戸時代）

会　　期：平成24年 **7/27**(金)～ **9/11**(火)　※９月３日(月)は休館日
開場時間：午前９時～午後５時（入場は午後４時30分まで）
※８月25日(土)26日(日)は午後７時まで（入場は午後６時30分まで）
観 覧 料：無料　※クールライフプロジェクトの一環

《イベント報告》

「ストラスブール美術館展 ―ゴーギャン、ピカソから ローランサンまで―」

２０１２年４月20日(金)～５月20日(日)
主催／「ストラスブール美術館展」実行委員会
（福井県立美術館、福井新聞社、ＦＢＣ福井放送）

県立美術館では、福井新聞社、ＦＢＣ福井放送と実行委員会を組織し、４月２０日(金)から５月２０日(日)まで、ストラスブール近・現代美術館のコレクションを中心に、シスレー、ゴーギャン、ボナール、マグリット、ピカソ他、１９世紀後半から２０世紀後半までのほぼ１世紀の間に活躍した作家の作品を紹介する「ストラスブール美術館展　―ゴーギャン、ピカソからローランサンまで―」を開催しました。

全国巡回の初会場となった本展では、巡回作品だけでなく、県内の著名な美術コレクターである小野光太郎氏よりマリー・ローランサンの優品５点を特別賛助出品していただくとともに、当館館蔵の版画作品からゴーギャン２点、ピカソ３点、シャガール１点、ミロ３点をあわせて展示し、合計６０作家９７作品を紹介しました。

「館長によるギャラリートーク」、小中学生を対象とした「担当学芸員による学校鑑賞会」、福井大学生によるワークショップ「モダンアート探検隊～３色の絵の具で巨匠に挑戦」等多彩なイベントが行われ、当初の目標をはるかに上回る２６，８５０人余りの方々に展覧会を楽しんでいただくことができました。

この場を借りて、お礼申し上げます。

開会式

２万人目の来場者に記念品贈呈

館長によるギャラリートーク

担当学芸員による学校鑑賞会

ワークショップ「モダンアート探検隊～３色の絵の具で巨匠に挑戦」

福井県立美術館
ボランティアの会

“ボランティアの会”の会長として

ボランティアの会　会長
西村　和修

私は昨年春に“ボランティアの会”に入会しましたので、まだ１年余りしか経っていません。

したがって、4月に会長になってもまだ具体的に指針や方策があるわけではありません。

ただ、会長として会員の皆様が楽しくボランティア活動ができる様、運営委員の方に支えられながら次の２点に取り組みたいと考えています。

１．会員とのコミュニケーション作り

２．若い人の美術館への集客アップ

先ずコミュニケーションについてですが、私達の活動は基本的には“美術館の受付業務”と“展覧会開催時での会場監視業務”がメインです。現在87名が会員ですが、活動は各自が都合のつく日（約２回／月）に活動しますので、全員が一同に顔を合わせることはほとんどありません。その為どうしても連帯感は希薄になりコミュニケーションも滞りがちです。

昨年の私は、活動についてわからないことや問い合わせたいことがあっても普段顔も合わせない運営委員に直接お聞きすることは気が引けましたのでそのままにしておくことがありました。

もし、このような時に文書で問い合わせできるシステムがあれば活用していたかもしれません。

そこで、今回運営委員会にはかりボランティアの会事務室に投書箱を設置すること提案し了承されました。

また、従来より“ボランティア通信”が運営委員により発行されてきましたが、私としてはこの１年事務局からの一方的なお知らせと実績報告のような印象を持っていました。

この“ボランティア通信”に投書内容や問い合わせに関する返答を載せ会員のみんなが情報交換できるようにしたいと考えています。まあ、この投書箱が十分に活用されるかどうか効果の程はわかりませんがとりあえずやってみようと思います。

次に若い人へのアプローチですがこれは難しいです。

私は若い人にもっと美術に興味を持ってもらいたい。美術を通し心を豊かにして創造力を養ってほしいのです。私は長い間サラリーマン生活を続けてきて、今企業がいかに社員に対し創造力や発想力，企画力を求めているかを痛感しました。頭でっかちの知識は今やコンピュータがしてくれます。現代社会では技術にしろ経営にしろ新しい視点にたったアイデアが必要です。これらの能力を伸ばす為にも、若い人が今以上に美術に関心を持ち美術館に足を運んでくれることを期待しています。その為に、美術館と協調し私達ボランティアとしてできる支援はしていきたいと思います。

最後に私達の活動が福井県民の方により認知され、より多くの人が活動を支えてくれることを願います。今年どれだけできるかわかりませんが精一杯務めますのでよろしくお願いします。

ストラスブール美術館展　―ゴーギャン、ピカソからローランサンまで―　を鑑賞して

著名な画家の作品を間近で鑑賞出来るのは嬉しいです。視覚だけでなく、会場内のいつもにない緊張感は、ここち良かったです。

橋本多美子

館長さんから近代美術史の説明や画家の裏話など分かりやすく伺え、1時間では足りないほどの鑑賞会に参加。今回の美術展をより深く味わえるきっかけになりました。
小野さん提供、マリーローランサンの椅子は展示のホットスペースとなり、その辺りは混み合った会場のムードが和んで感じました。

牧野惠子

ああそうだ、この頃のヨーロッパはジャポニズムの時代だったのだ。
絵画の主題の後に描かれている屏風や小物を見て思った。
日本美術の左右対象の構図や空間構成はヨーロッパの人々の目にどんなにか新鮮に映ったことだろう。作品のすばらしさとともにそんなことが心に浮かんだひとときであった。

松田育枝

福井県立美術館 友の会

福井県立美術館友の会は、結成されて今年で35周年にあたる。

今までには、日本画・油彩画をはじめ写真、ステンドグラス等々の実技講座を年間２講座ずつ行ってきたが、最近特に人気なのは絵画の基礎、デッサン講座！17年度の木炭デッサンに始まり鉛筆・コンテと続き題材も石膏、静物、昨年度からは人物と毎回「今年度で最後」と先生に言われながらも、定員を超える応募があり続いてきている。先生いわく、「単色で何の面白みもないのに皆さん熱心に、お休みも少なくなぜ続けられるのだろう」と驚いておられる。先生の魅力もあるのだろうと思うが・・・。

デッサン講座

さて、24年度第１回目の講座は、会員からの要望もあり裸婦を含む「人物デッサン講座」。定員20名のところ32名の応募があり、落とすのもかわいそうということで、少し狭いが全員で始める事とする。締め切り後にも、何人か問い合わせがあったが、丁重にお断りした。

5月23日から始まった当講座、やはり皆さんお休みも少なく３時間をとても集中して熱心に受講している。

友の会実技講座を受講して

デッサン力の全くない私ですが、3月の講座展示会を見学し、ぜひともやってみたくなり入会しました。
いっしょに描きながら、とても刺激を受けてます。先生の控えめなワンポイントアドバイスも、ぐっと心に響いてます。　牧野恵子

毎回友の会の講座を楽しみにしています。
非常に疲れますが充実した3時間で、人物を勉強する上でとても勉強になります。　N

退職後のスケジュールにとらわれない毎日の中で唯一の決まった一週間のひとときです。
少しでもデッサンがうまくなるように頑張りたいと思います。S.T

昨年より参加し、とても楽しく、3時間もあっという間にすぎ充実したデッサン会です。
参加費もとても格安でとても満足してます。　Y.H

どんなに疲れていても気になることがあっても帰りには知らないうちにすっきりとした気分になります。　Y.Y

小野忠弘展vol.2　ドローイング作品を中心に　―線の力―

2012年 **5/9**(水)～**6/3**(日)　**E&Cギャラリー**

5月９日(水)から６月３日(日)までE&Cギャラリー（福井市中央1-20-25）において、戦後日本を代表する現代美術家、小野忠弘の展覧会「小野忠弘展vol.2　ドローイング作品を中心に　―線の力―」が開催されました。2010年に開催された「小野忠弘展vol.1」の続編となる本展には、小野忠弘の大きな特徴のひとつである「線の力」の魅力が凝縮された８点が出品されました。これらの作品はいずれも福井県立美術館の所蔵品です。5月12日(土)に関連企画として開催されたギャラリートークでは、前回に続いて西村直樹学芸員を講師に迎え、「廃墟、質、零度」をキーワードに小野作品の魅力を探りました。美術関係者やファン、生前の小野氏を知る人等多くの方々が訪れ、熱気溢れる中での開催となりました。

（NPO法人E&Cギャラリー理事、福井大学准教授　湊　七雄）

ギャラリートーク（右より西村学芸員、湊准教授）